

安藤直太朗監修

名古屋 三国伝記研究会編

三国傳記

△平仮名本▽中

古典文庫

安藤直太朗監修

名古屋
屋 三国伝記研究会編

三国傳記

△平仮名本▽中

古典文庫

古典文庫第四三六冊

昭和五十八年一月二十日印刷発行

非売品

編者 名古屋三国伝記研究会

発行者 吉田幸一

記伝三国
中

印刷者 白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

三国伝記卷第七	三
三国伝記卷第八	五七
三国伝記卷第九	一〇九
三国伝記卷第十	一九五
三国伝記卷第十一	二八五

三 国 伝 記

△平仮名本▽
中

安藤直太朗蔵

三国伝記卷第七目錄

舎衛城しやゑしやうの老翁乞食之事らうおうこつしき

仏鉄ふつてつ、如意珠にょいしゆをとらんとする事

清道きよみちとんせいの事

地藏ちそうほさつゐんいの事

地藏ほさつ、ちこくに入て、さい人をたすけ給事

江川大谷山かうしうおほたに、地福寺ちふくの地藏像そろうの事

天竺てんちくとふらせんのふもと、きやうたいちやうしや長者のけんそく、
悪鬼あくきに

なやまさるゝを、地藏ほさつすくひ給事

唐たうの劉侍郎りうしらうそせいの事

南都なんとの法蔵僧都ほうざうそうづ、帝尺宮たいしやくきう并閭摩王宮(ママ) ゑんまわうきうに至いたて、説法せつほうの事 付地こ
くに入、母ははにたいめんし給事

三国伝記卷第七

しやゑしやうの老^{らう}おう、こつしきの事〔卷七―一話〕（板本四―二八）

むかし、天^{てん}ちくしやゑしやうに、老おうらうは夫婦ありけり。そのか
たち、ひせんといやしうして衣^{ころも}もなく、すかたかほはせ、せうすいと
かしけて、くつもなし。ろとうにさまよひ、こつしきす。ふつ、みて
したちにのたまはく、このふうふのものは、若^{ちやくねん}年よりつとめおこなは
ゝ、いまははや、あらかんくわを得へし。壮^{そう}年より、つとめおこなは
ゝ、初^{しよくわ}果にはかなふへし。老^{らうねん}年にをよふとも、一しやうふさうの長^{ちやうしや}者
となるへき、しゆくしうありといへとも、けたいにして一しやう過

し、老後^こにをよんで、こつかい人となれる也と、の給へり。

仏鉄如意宝珠^{ぶつてつ いほうしゆ}をとらんとする事

〔卷七——二話〕（板本四——二九）

むかし、仏^{ぶつ}てつといふ、たつとき僧ありけり。しひのおもひふかく、あひみんのころをおこし、竜宮^{りうくう}に有ところの、によひほうしゆをもとめて、はんみんをすくははやとおもひ、小せん^{せう}に乗^{せう}して、うみにうかへり。すなはち、くちにしんこんをしゆし、手にけんゐんをむすんで、りうわうをせむ。りうわうたへかねて、かの玉をさゝけうかひ出て、これを僧にさつけんとす。そのとき、仏鉄^{ぶつてつ}かた手には、けんゐんをむすひ、かた手にて玉^{たま}をとらんとす。こゝに、竜王^{りうわう}ひたんしていは

く、むかし、竜女^{りうによ}か、ほうしゆを尺尊^{しやくそん}にけんせしとき、かたしけなく

も、ほとけは、ちやうゑの御手^{みて}をもつて、うけたまへり。りうくうの

てうほう、むけほうしゆ、我いまふつてつに奉る。両手^{りやう}をひろけて、

おさめうけたまへ。なんそ、かた手にてとらんとし給そと、いひけれ

は、けにもと思ひて、けんゐんをはなちつゝ、もろ手をひろけとらん

とす。そのとき、竜^{りう}くう、ちからをえて、なみ風をおこして、ほうしゆ

をちして、かいていに入にけり。ふつてつは、舟をなみにくたかれ、

うみにたゝよひて、すてにいのちをうしなはんとす。その折ふし、な

ん天竺^{てんちく}のはらもんしゆ、ほたいといへるほんそう、五たいさん^{ごたいさん}にのほ

りて、文珠^{もんしゆ}ほさつ、日本^{にんぽん}におはしますといふ事をきゝて、小船^{せうせん}に乘^{せう}し、

日本にわたるとて、ふつてつか、うみにたゝよへるをたすけつゝ、我

舟にのせて、日本国にわたりけり。

たゞし、仏哲^{てつ}は、林邑^{りんゆうこく}国の人なり。りんゆうらくといふかくは、此人のつたへけるとそ。

清道^{きよみち}とんせいの事

〔卷七―三話〕〔板本四―三〇〕

おはりのくになかしまのこほりに、こんの介^{すけ}なりきよといふものゝ子に、きよみちといふ者^{もの}ありけり。わかくさかなりし身^みなれば、さらに、いんくわのことはりをもわきまへす、あけくれ、かりすなとりをことゝし、日夜^{にちや}いちゆうをのみこのめり。そのころ、なんととうたいしの大^{たい}仏^{ふつ}、御^ごこんりうありて、すなはち、堂^{たう}供^く養^{やう}おこなはる。このこ

と、千さい一くの大ほうゑなれば、日本^{にんほんこく}の万民^{ばんみん}、たうそく、なん女、

けちゑんちくのために、遠^{えん}ろをし^しのき、東さいなんほくより、のほり

あつまりけるほとに、おひたゝしきくんしゆにてそありける。さるほ

とに、なりきよも、このほうゑを、おかみたてまつらんとて、さいしし

うるい、あひくしてのほりけり。からんのいかめしきありさま、ふつ

そうのすくれたまへる御さうかう、ほうゑのきしき、さんけいのくん

しゆ、いつれもいつれも、世にまれなる事なれば、諸^{しよ}人かんたんし、す

いきのなみたをなかしけり。こゝに、きよみち、ほうゑのしゆせうなる

ことをおかみたてまつりて、しゆくせんやもよほしけん、道心^{たうしん}そおこ

りける。ときよこそおほけれ、この御代にむまれあふて、かゝる大く

やうにあひたてまつる事、ひとへに、うとんけの花まち得たるかこと

し。これを、ほたひのたねとし、無為むゐに入はやと、おもひさためけり。
このたひは、なにとなく、ちゝはゝにうちつれて、本ほんこくにくたりぬ。
そのゝち、ひまをうかゝひて、しのひてみやこへのほりつゝ、とうた
いしにまいりつゝ、しゆんせうはうの御めにかゝり、出家しゅつけのそみあ
るよし申ければ、上人見たまふて、御へんのていをみるに、出家なと
すへき人にはあらず。いつくの人にて候そや。なにゆへに、思ひたち
たまふそと、とひたまへは、きよみち、こたへて申やう、これは、おは
りの国きよちうのものにて候か、いまた二親しんそんしやうにて、とせい
ゆたかにはへれば、身におゐて、さらにふそくなること候はす。しか
るに、さんぬるころ、大からんの御くやうを、おかみたてまつりてよ
り、このかた、ほんなうこうくのあさましきありさまをくわんし、さ

りかたきさいしをすてゝ、出家入道(ママ)を、おもひたちはへると申す。上

人このよしをきこしめして、さてもありかたき御事かな。わかつてし、

あまたおほしといへとも、みなもつて、世にすてられたる、たうしん

しやなり。御へんは、まことに、世をすつる人なりとて、すなはち、

かみをそり、出家のかたちにそなしたまひける。かくてにうたう、上しやう

人にんにつかへ奉り、水をくみたきゝをとり、あさゆふのつとめ、ちやう(ママ)

やのねん仏おこたる事なく、すてに三とせになりにけり。上人、その

心さしの、さつ(ママ)なるていをみたまひて、高野山かうやさんに新へつしよと申とこ

ろは、我こんりうのあんしつなり。こくらくわうしやうをねかへる、

しんしつのたうしんしやは、我すゝめて、このあんしつにきよせし

むるなり。はやく、かああんしつにいたりて、きやうしやにつらなり、

しつかにねんふつし給へと、すすめ給ふ。にうたううけたまはり、まことに、そく人ちかきあたりに住候へは、ほんふのあさましきは、女人をみては、つまの事を思ひ出てしのひかたく、小児をみては、わか子もいまはこれほとにそなりぬらんと、なつかしうはへれは、しゆきやうのさはりにて候しに、ふかき山のおくのすまるこそ、身において本望に候。たゞし、師匠にうとくなりたてまつることこそ、かへすく心くるしうはへれとて、つるに高野山にのほりけり。すなはち、わうしやうゐんにいたりて、廿四人の衆にあひつらなり、一しんふらんにねんふつし、ともに月日ををくりけり。

さて、ふるさとのちゝは、きよみちかゆくゑもしらすうせけるを、いかなるゆへやらんとて、りんこくたこくをたつねもとめけれと